

明治期における少年雑誌『少年園』の読み物と読者投稿

本多 南美

本論文では、明治期における少年雑誌『少年園』に掲載された読み物・読者投稿欄の分析を行った。

『少年園』は、1888（明治21）年から1895（明治28）年の六年四カ月にかけて、少年園社が発行していた子ども向け雑誌である。小学生から中学生までの少年を読者対象とし、名称に初めて「少年」という語を冠した雑誌であり、それまでの子ども向け雑誌が子どもの投稿作文を掲載したものであったのに対し、『少年園』は初めて教養や娯楽記事などの読み物を掲載していた。この点において、『少年園』は子ども向けの読み物雑誌として先駆的存在であったとされている。教育者である主幹の山縣悌三郎が、教育において少年向けの学習的読み物の重要性に鑑み発刊した経緯を持ち、創刊目的には当時の少年向けの読み物の不足を補うことと、都会の少年と地方の少年の交流が掲げられた。

『少年園』に関する先行研究については、掲載された読み物の一部についての研究や同誌を用いて少年の表象について研究したものが存在するが、『少年園』そのものの特徴を捉えた研究は存在しない。そこで、本論文ではこれまでの研究では扱われてこなかった学習関連の記事の分析をするとともに、読者投稿欄から、都会と地方の少年の実際の交流の態様を調査し、教育的雑誌としての『少年園』の特色を明らかにすることを目的としている。

誌面構成、記事タイトル、記事内容の分析により、『少年園』の教育的特徴としては、学修欄において科学的な読み物を特に多く扱い、その内容には最新性が重視されていたことが明らかになった。文芸欄では恋愛等を扱う小説はふさわしくないとされ、国文学や古典文学を主に取り扱い、時代が下ると海外文学も取り入れられた。その他特徴的な記事としては遊学情報と偉人伝が挙げられ、前者からはこの雑誌が都会の学校へ進学し学びを深めることを強く奨励していたことがわかる。偉人伝にはイギリスやアメリカを中心とした西洋諸国と日本を中心とした人物の成功譚が多く、少年雑誌らしい特徴として偉人の少年時代を取り上げた記事がみられた。

執筆者についての分析からは、主な執筆者は詩人や小説家などの作家だけではなく、多様な職業分野の執筆者が存在していたことが分かった。なかでも工学者や化学者などの科学者の存在は、科学的な読み物を重要視する『少年園』の学習記事を支えていたと考えられる。

読者投稿欄の分析からは、全国にわたって雑誌が読まれていたことがわかり、創刊目的に掲げられた都会の少年と地方の少年の交流は実際に叶っていたことが明らかになった。投稿者は、遊学などの理由で遠く離れた身近な人への手紙を書く形や、自分の体験したことを綴ることによって互いの見聞したことを共有する形、英文和訳や漢文訳、読み物への質疑応答を相互に交換する形などを取って交流を深めていった。

（指導教員 原 淳之）